

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780408

研究課題名(和文) 大学生による不登校児童生徒の支援に関する研究：対象児のアセスメントと介入効果測定

 研究課題名(英文) A Study of support program for children of "non attendance at school":  
 Assessment of children and analysis of intervention effect

研究代表者

大西 将史(Ohnishi, Masafumi)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(教員養成・院)・准教授

研究者番号：20568498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、非専門家(大学生)による学校支援(ライフパートナー：LP)事業において、(1)LPの支援を受ける児童生徒のアセスメント、(2)LPによる支援効果の測定、を行うことを目的とするものである。

調査の結果(1)LPによる支援を受けている生徒のメンタルヘルス及び不適応状態は一般生徒と比較して有意に悪く、ストレスへの対処方略においても問題を抱えていた。(2)一般生徒のストレスが時間経過にともなって高くなる一方で、LPによる支援対象生徒は変化がなく、LPによる支援が予防効果を有していた。問題行動においては支援によって低下する効果がみられた。

研究成果の概要(英文)：We have coordinated Life-Partner Program (LPP) where undergraduates in the department of education support children who feel difficulties in attending school and performing many school activities, and have examined how such support activities should be developed. The purposes of this study were (1) to assess psychological states and support needs of children who was supported by LP students, and (2) to analyze intervention effect of the LPP. From results of several surveys, (1) state of mental health and adjustment of children were significantly lower than that of general children, and they demonstrated poor stress coping strategies. (2) As with the intervention effect, stress became higher in the general children, whereas that of children with special needs children supported by LP didn't become higher. This suggested LPP has preventive effect. Moreover, LPP demonstrated significant effect on reducing problematic behaviors.

研究分野：発達心理学

キーワード：不登校児童生徒、気がかりな児童生徒、発達障害傾向、学業不振、大学生による支援、非専門家、アセスメント、支援効果

### 1. 研究開始当初の背景

不登校児童生徒数は11万人を超え、依然として多い(文部科学省、2012)。不登校になることで、学習面、対人面での発達への阻害はもちろん、後ろめたさや自尊心の低下、先が見えない不安といったネガティブな状態をもたらし、精神障害や社会的ひきこもりなどへと問題が拡大する(斉藤、1998)。これらの児童生徒への対応は急務であるが、教員は多忙を極めており、一人一人に十分な時間を割いて個別の対応をすることは難しい。そのため近年では、学生ボランティアによるサポート実践が多く行われている。

筆者らは、不登校状態にある、あるいは不登校状態に移行するリスクの高い特別な支援の必要な児童生徒に教職志望の大学生が一人ずつついて支援を行う『ライフパートナー(以下LP)事業』を展開している。LP学生は児童生徒と年齢が近く身近なモデルとなりやすいお兄さんお姉さんの立場から、個々のニーズに合わせて学習はもちろん、相談やおしゃべり、遊びの相手、掃除や部活などの学校活動と一緒に行動するなど、多様な支援活動を行っており、他の専門職では困難な幅広い支援を提供できる(松木ら、2014)。

しかしながら、LP事業の成果を学術的観点から検討することは十分になされてこなかった。同様に、従来の学生ボランティアに関する類似の実践・研究でも、派遣自体に重点が置かれ、児童生徒の状態や支援ニーズはそれほど取り上げられてこなかった。しかし、LPを必要とする児童生徒が、そもそもどのような状態でのどのような支援ニーズを有しているかを科学的観点からアセスメントすることは極めて重要な課題であり、それによりアセスメント結果に応じた支援アプローチを選択できるようになる。また、LPの効果についても科学的観点から検討し、支援方法の改善に寄与する知見を蓄積することが必要であった。

### 2. 研究の目的

本研究では、(1)LPを利用する児童生徒の状態と支援ニーズのアセスメント、(2)LPの支援効果の測定、を行うことを目的とする。具体的には、(1)状態と支援ニーズのアセスメントでは、児童生徒自身、児童生徒の担任教師、保護者から、多面的に心理・行動面の情報を収集し、尺度の標準値や、筆者らが行ってきた大規模コホート研究により得られた一般児童生徒の標準値と比較することで、個々の児童生徒の特徴を明確にする。(2)LPの支援効果の測定では、LPの介入前後(pre-post)において複数回の測定を行い、得点の変化を検討する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 状態と支援ニーズのアセスメント

##### 1. 生徒への調査

###### 1) 調査対象

LPによる支援を比較的多く受けている中学校の全校生徒を対象に質問紙調査を実施した。合計781名(男子415名、女子366名)から有効回答を得た(回収率97.7%)。その内、回答の不備のあった10名を除き、771名(男子408名、女子363名)を分析対象とした。なお、データには尺度ごとに欠損値が見られたため、分析ごとにサンプルサイズが異なる。

###### 2) 調査内容

DSRS-C短縮版(並川ら、2011)「そんなことはない」～「いつもそうだ」の3件法。高得点ほど抑うつ程度が高いことを意味する。

HAQ-C短縮版(谷ら、2014)「全く当てはまらない」～「とてもよく当てはまる」の5件法。高得点ほど攻撃性が高いことを意味する。

小中学生用社会的不適応尺(伊藤ら、2014)友人ストレス、学校ストレス、家庭ストレスの3つの下位尺度からなり、「あてはまらない」～「あてはまる」の3件法。高得点ほど不適応の程度が高いことを意味する。

日本語版SDQ自己評定フォーム(野田ら、2013)情緒不安定、問題行動、多動・不注意、友人関係問題、向社会的行動、困難性総合(向社会的行動を除く4つの指標の合計)の6下位尺度からなり、「当てはまる」～「当てはまらない」の3件法。高得点ほど各行動特徴が強いことを意味する。

小学高学年・中学生用反応スタイル尺度(村山ら、2014)問題解決、反芻、思考逃避、気晴らしの4つの下位尺度からなり、「ほとんどない」～「ほとんどいつも」の4件法。高得点ほどその対処行動を取ることを意味する。

###### 3) 手続き

各クラスで質問紙を配布し回答を求めた。調査はLPによる支援開始前の5月に行った。なお、十分なサンプルサイズを確保するために2014年と2015年の2年間に渡り調査を行った。

### 2. 教師への調査

#### 1) 調査対象者

(1)状態と支援ニーズのアセスメントにおける生徒への調査を行った中学校において、学業不振や発達障害傾向等の心理・行動的問題があり特別な支援が必要な生徒及び気がかりな生徒のうち、特に配慮が必要でありLP学生による支援を重点的に受けた生徒33名について、特性や指導ニーズを把握するための質問紙に担任教師が回答を行った。

#### 2) 調査内容

日本語版SDQ教師評定フォーム(野田ら、2013)自己評定フォーム同様の下位尺度構成であり、「あてはまらない」～「あてはまる」までの3件法。高得点ほど各行動特徴が強いことを意味する。

児童用社会的スキル尺度教師評定版 磯

部ら(2006)の25項目のうち、全5因子(働きかけ、学業、自己コントロール、仲間強化、規律性)それぞれ3項目ずつ計15項目を用いた。「あてはまらない」～「あてはまる」までの3件法。高得点ほどスキルが高いことを意味する。

### 3) 手続き

教師に質問紙を配布し回答を求めた。調査はLPによる支援開始前の5月に行った。なお、十分なサンプルサイズを確保するために2014年と2015年の2年間に渡り調査を行った。

## (2) LPの支援効果の測定

### 1. 生徒への調査

#### 1) 調査対象

(1) 状態と支援ニーズのアセスメントにおける対象者と同様である。

#### 2) 調査内容

(1) 状態と支援ニーズのアセスメントに関する調査と同様の内容である。

#### 3) 手続き

各クラスで質問紙を配布し回答を求めた。調査は、LPによる支援開始前の5月と、LPによる支援終了後の12月の2回の時期に行った。なお、十分なサンプルサイズを確保するために2014年と2015年の2年間に渡り調査を行った。

### 2. 教師への調査(1)

#### 1) 調査対象

(1) 状態と支援ニーズのアセスメントにおける対象者と同様である。

#### 2) 調査内容

(1) 状態と支援ニーズのアセスメントに関する調査と同様の内容である。

#### 3) 手続き

教師に質問紙及び援助チームシートを配布し回答を求めた。LPによる支援開始前の5月と、LPによる支援終了後の12月の2回の時期に行った。なお、十分なサンプルサイズを確保するために2014年と2015年の2年間に渡り調査を行った。

### 3. 教師への調査(2)

#### 1) 調査対象

2. の調査対象校に加えて複数の公立小学校において、LPによる支援を受けている児童生徒の担任教師に対して調査を依頼した。156名の協力が得られた。

#### 2) 調査内容

LPの活動に関する評価項目「LPを利用して良かった点」「LPの利用により児童生徒が良くなった点」「LPを利用して、もっとこうすればよいと思った点やLPに対する要望」の3項目について自由記述で回答を求めた。

#### 3) 手続き

質問紙を各学校に郵送し、回答後に返送してもらう形式をとった。なお、十分なサンプ

ルサイズを確保するために2013年と2014年の2年間に渡り調査を行った。

### 4. 保護者への調査

#### 1) 調査対象

LPによる支援を受けている児童生徒の保護者に対して調査を依頼した。83名からの協力が得られた。回答に不備のあった4名を除いた79名を分析対象とした。

#### 2) 調査内容

日本語版SDQ親評定フォーム(野田ら、2012)自己評定フォーム同様、「あてはまらない」～「あてはまる」の3件法。高得点ほど各行動特徴が強いことを意味する。

LP活動開始後の子どもの変化についての認知NHK放送文化研究所(2003)による児童生徒の行動特徴に関する21項目について、LPによる支援後にそれらの行動に変化があったかを「少なくなった」「多くなった」「特に変化なし」「分からない」の4つの選択肢で回答を求めた。

LP活動に対する感想・要望 自由記述で回答を求めた。

#### 3) 手続き

質問紙および調査依頼書を各学校に郵送した後、それらを児童生徒を通じて保護者に配布し回答後に返送してもらう形式をとった。なお、十分なサンプルサイズを確保するために2013年～2015年の3年間に渡り調査を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 状態と支援ニーズのアセスメント

##### 1. 生徒への調査

全生徒を、一般、LP支援対象、気がかり(担任教師から見て気がかりであるがLPによる支援は必要と見なされなかった生徒)の3群に分け、各群における各尺度得点を分散分析によって比較した(図1～4)。その結果、抑うつ及び反応スタイルの問題解決においてLP支援対象が一般よりも有意に高く、SDQの向社会的行動を除く全下位尺度、社会的不適応尺度の友人ストレス及び学校ストレスにおいてLP支援対象及び気がかりが一般よりも有意に高かった。LP支援対象生徒は、様々な指標においてメンタルヘルスの悪化や不

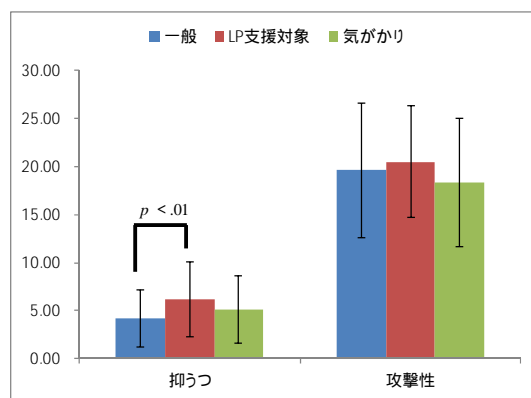


図1 各群の抑うつ及び攻撃性の得点及び検定結果

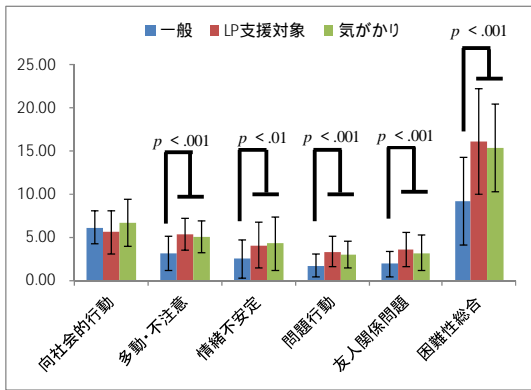


図2 各群のSDQの得点及び検定結果

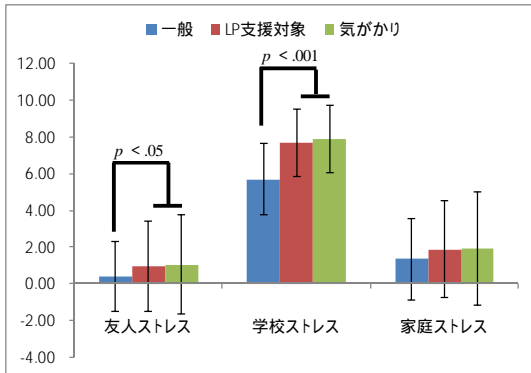


図3 各群のストレス得点及び検定結果

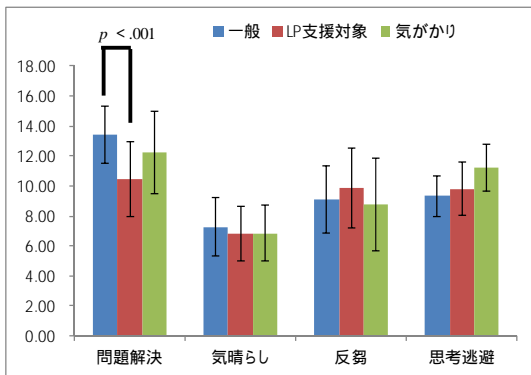


図4 各群の反応スタイル得点及び検定結果

適応状態、対処方略の脆弱性などの問題があることが示唆された。また、気がかり生徒においても LP 支援対象生徒と同等の問題を抱えていることが示唆された。

## 2. 教師への調査

LP による支援の対象となった生徒について教師が質問紙に回答した結果を集計した(表1)、大規模コホートデータにおける同じ

表1 SDQ及び社会的スキルの得点

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	偏差値
SDQ						
向社会的行動	32	0	9	3.94	2.45	39.90
多動性・衝動性	33	0	10	5.48	2.76	65.30
情緒不安定性	33	0	9	3.55	2.49	72.02
問題行動	33	0	8	3.09	2.28	65.37
友人関係問題	32	0	8	3.31	2.22	66.40
困難性総合	32	5	29	15.50	6.15	72.60
社会的スキル						
働きかけ	31	3	9	5.65	2.04	33.91
学業	31	3	9	5.35	1.74	33.90
自己コントロール	30	3	8	4.93	1.66	36.19
仲間強化	30	3	7	4.23	1.19	37.78
規律性	31	3	9	6.74	1.61	35.15
合計	29	16	36	26.93	5.69	30.66

性別・学年の標準得点をもとに偏差値(平均値 50、標準偏差 10)を算出したところ、SDQの向社会的行動及び社会的スキルの全項目において、平均よりも1標準偏差以上低い値を示していた。また、SDQの全ての不適応指標においては平均よりも15以上高い値を示しており、不適応の程度が深刻であることが示唆された。

## (2) LPの支援効果の測定

### 1. 生徒への調査

LPによる支援前後での各尺度の変化を群(被験者間要因)×時期(被験者内要因)を独立変数、各尺度得点を従属変数とする2要因混合計画の分散分析を行った(図5~8)。

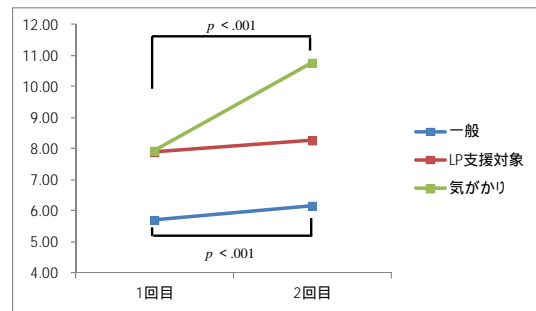


図5 各群における学校ストレスの変化

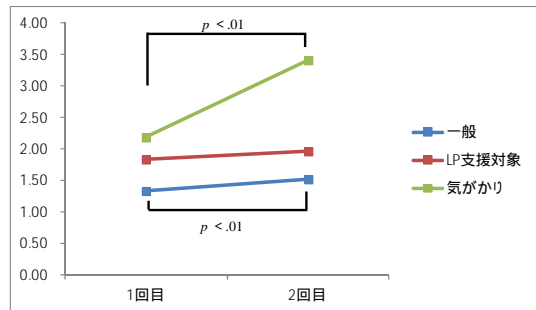


図6 各群における家庭ストレスの変化

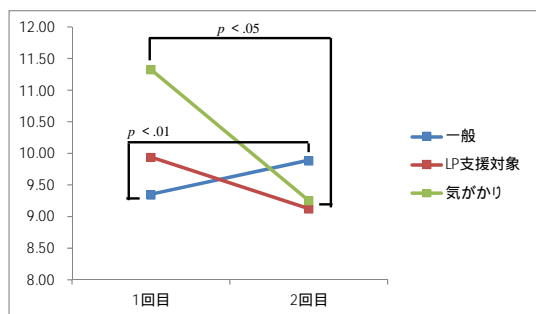


図7 各群における思考逃避の変化

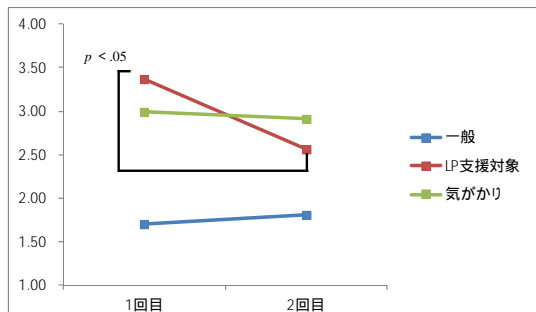


図8 各群における問題行動の変化

その結果、学校ストレス、家庭ストレス、思考逃避、問題行動において時期×群の交互作用が有意であり、各群における時期の単純主効果の検定を行ったところ、学校ストレス、家庭ストレス、思考逃避においては一般が支援前よりも支援後の方が有意に高かった。一方気がかりは支援前より支援後の方が有意に低かった。学校ストレス及び家庭ストレスにおいては、LPによる支援を特に受けなかった生徒は悪化しているのに対してLPによる支援を受けた生徒は悪化していないことを意味しており、LPによる支援には予防効果があることが示唆された。また、問題行動においてはLP支援のみ、支援前よりも支援後の方が有意に得点が低かった。このことは、LPによる支援によって問題行動が抑制されたことを示唆している。

### 3. 教師への調査(1)

LP支援前後での各尺度の変化を対応有りのT検定によって検討したところ、いずれの指標においても有意な変化は認められなかった。

### 4. 教師への調査(2)

LPを利用してよかった点及び生徒にとってLPを利用してよかった点についての自由記述を分類したところ、生徒にとっては情緒安定、積極的態度、充実した時間、人間関係・視野の広がり、学習意欲向上、生活リズム・登校意欲の向上というカテゴリーが生成された。教師にとっては、負担軽減、心理的支えの二つが見出された。さらに、生徒同士をつなぐ、学級集団の活性化、安全確保等により広い範囲における効果も認められていることが示唆された(図9、末尾に掲載)。

### 4. 保護者への調査

LPによる支援後の児童生徒のネガティブな行動特徴が「少なくなった」と回答した割合は、緊張・不安(44.0%)、イライラ・怒りっぽい(38.7%)、何をしてもやる気がでない(34.2%)、何を言っても黙っている(30.1%)などの項目で顕著であった(表2、末尾に記載)。

以上から、生徒本人、教師、保護者の3者に対す調査を通して、LPによる支援を受けている生徒のアセスメント及びLPによる支援効果を検討することができた。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

鈴木静香、織田安沙美、大西将史、廣澤愛子、笹原未来、松木健一、地域組織間連携による学校支援ボランティア事業の支援体制づくり 非専門家(大学生)を支える発達障

害支援アドバイザーの活動実践を事例として、福井大学教育実践研究、査読有り、2017、41、37-49

[学会発表](計9件)

大西将史、廣澤愛子、笹原未来、松木健一、非専門家(大学生)による学校支援ボランティアに関する研究(8)：支援を受けている子どものメンタルヘルスおよび行動傾向、日本教育心理学会総会発表論文集、2015、57、657

Ohnishi, M.、Hirosawa, A.、& 4persons、A Study of the School Volunteer Program by Non-specialists (University Students) (3):The effect of the Life Partner Program (LPP). The 38th International School Psychology Association Conference、2016、(Proceedings)

[図書](計1件)

松木健一、廣澤愛子、笹原未来、大西将史、大学と地域の連携による不登校児・発達障害児への支援、エクシート、査読無し、2014

### 6. 研究組織

#### (1)研究代表者

大西 将史(OHNISHI Masafumi)  
福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門・准教授  
研究者番号：20568498

#### (2)研究分担者

なし

#### (3)連携研究者

廣澤 愛子(HIROSAWA Aiko)  
福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門・准教授  
研究者番号：10345936

#### 笹原 未来(SASAHARA Miku)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門・准教授  
研究者番号：90572173

#### 松木 健一(MATSUKI Kenichi)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門・教授  
研究者番号：10157282

#### (4)研究協力者

鈴木 静香(SUZUKI Shizuka)  
織田 安沙美(ODA Asami)

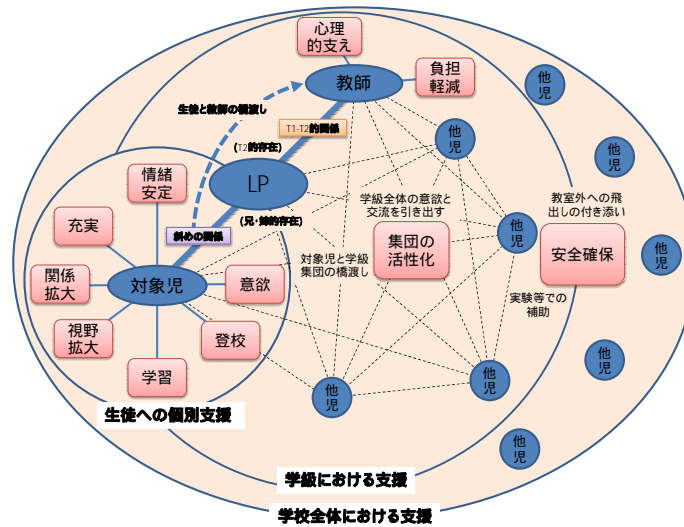


図9 「LPを利用してよかった点」及び「LPの利用により児童生徒が良くなった点」に対する教師の自由記述の分析結果

表2 LPによる支援の効果（保護者に対する調査の結果の抜粋）

	分からない	多くなった	特に変化なし	少なくなった	合計
1. 学校に行くのを楽しそうにしている	4 (5.3)	<b>34 (45.3)</b>	34 (45.3)	3 (4.0)	75
2. 緊張していたり、不安そうにしている	3 (4.0)	1 (1.3)	38 (50.7)	<b>33 (44.0)</b>	75
3. すくにイライラしたり、怒りっぽい	2 (2.7)	3 (4.0)	41 (54.7)	<b>29 (38.7)</b>	75
4. 友だちと遊んだり関わることを楽しそうにしている	4 (5.4)	<b>33 (44.6)</b>	34 (45.9)	3 (4.1)	74
5. 夜、眠れない	2 (2.7)	4 (5.3)	53 (70.7)	<b>16 (21.3)</b>	75
6. 疲れやすい	7 (9.5)	5 (6.8)	50 (67.6)	<b>12 (16.2)</b>	74
7. 朝、食欲がない	2 (2.7)	4 (5.4)	52 (70.3)	<b>16 (21.6)</b>	74
8. 肩がこる	20 (27.4)	1 (1.4)	47 (64.4)	<b>5 (6.8)</b>	73
9. 立ちくらみやめまいがする	20 (27.4)	1 (1.4)	47 (64.4)	<b>5 (6.8)</b>	73
10. 物をなげたり、こわしたりする	8 (11.1)	0 (0.0)	53 (73.6)	<b>11 (15.3)</b>	72
11. 何を言っても、黙っている	2 (2.7)	3 (4.1)	46 (63.0)	<b>22 (30.1)</b>	73
12. 注意をすると、すぐ家を飛び出していく	9 (12.7)	1 (1.4)	57 (80.3)	<b>4 (5.6)</b>	71
13. 大声をあげたり、わめいたりする	8 (11.4)	1 (1.4)	51 (72.9)	<b>10 (14.3)</b>	70
14. 自分の部屋から出てこない	4 (5.6)	3 (4.2)	54 (76.1)	<b>10 (14.1)</b>	71
15. 何をしてもやる気がでない	2 (2.7)	4 (5.5)	42 (57.5)	<b>25 (34.2)</b>	73
16. 親に嘘をつく	8 (11.4)	3 (4.3)	50 (71.4)	<b>9 (12.9)</b>	70
17. 「学校がつまらない」とよく口にする	4 (5.6)	4 (5.6)	43 (60.6)	<b>20 (28.2)</b>	71
18. 行き先を告げずに外出する	6 (8.7)	0 (0.0)	56 (81.2)	<b>7 (10.1)</b>	69
19. 家族を避ける	4 (5.8)	1 (1.4)	52 (75.4)	<b>12 (17.4)</b>	69
20. 言葉遣いが悪い	3 (4.2)	8 (11.3)	50 (70.4)	<b>10 (14.1)</b>	71
21. 自分自身について否定的な言動をする(例:自分なんかだめだ, など)	3 (4.1)	4 (5.5)	43 (58.9)	<b>23 (31.5)</b>	73